

令和6年度 学校評価(総括評価表)

令和6年度 学校評価(総括評価表)

重点課題	重点目標	自己評価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
		評価指標	評価指標による達成度	評価	(所見)		
◆児童生徒一人一人を大切に、その個性や能力に応じて自己実現を目指す個別最適で誰一人取り残さない教育の推進	<小学部> ・児童の様子や成長、体調等について学部全体で共通理解を図り、協力してよりよい支援について考える。	① 学部全体で児童について共通理解を図り、よりよい支援を工夫した学習活動を実施する。	① 日々の職員朝礼や学部会、Teamsでこまめな共通理解を図りながら、それぞれの児童に応じた支援や工夫をした学習活動を実施できた。	A	(所見) 当初口頭で頻繁な情報共有は図ったが、担任が伝えたいことがより具体的に伝わるようにICTを活用し、写真や動画で共通理解を図ることで、その都度変わる情報の更新を行った。この取組は、学部集会や合同の授業でより効果のある学習活動を実践することにつながった。今後は個々の児童の学習における支援についても共通理解を図り、効果的に授業に活かすことができるよう次のステップにつなげたい。	・オンラインの合同授業等児童生徒の実態に合わせて工夫された取組がなされている。 ・図書環境の充実について魅力的な取組がなされている。 ・鴨島図書館からの月50冊の本の貸し出しを活用して、学校の蔵書だけでは提供できない本とのふれあいの幅が広がり、本から学びを深められるよい環境にある。 ・児童生徒の障がいに応じた図書環境の充実が図られている。	
		活動計画	活動計画の実施状況				
		①-1 職員朝礼や学部会、ケース会等で児童の情報について共通理解を図る。 ①-2 児童の情報に基づいて、学部集会や合同の授業等で児童にとってより効果のある学習活動を考え、実施する。	①-1 学部会にて児童の情報共有をする際、モニターに動画や写真を映したり、Teamsにあげたりすることで、具体的に分かりやすくなることを意識して共通理解を図った。 ①-2 自宅訪問生と学校をオンラインで繋ぎ合同の授業を行う際には、児童の目標や実態に応じて、必要な配慮や活動内容を相談し、それぞれのわかりやすさや活躍の場を考えた学習活動を実施することができた。				
<中・高等部> ・生徒一人一人について学部全体で共通理解を図り、適切な支援や指導方法を考える。		① 学部全体でのケース会以外に、生徒一人一人について共通理解を図る会を実施する。	① 前後期、それぞれ中間期に、生徒一人一人について共通理解を図る会を1回ずつ実施することができた。	A	(所見) ケース会は個別の指導計画の様式にそって共通理解を図るが、生徒一人一人についての共通理解を図る会は、担任進行のもと、参加者が自由に意見を出し合うことを基本とした。一人一人の生徒について十分時間を設け、話やすく、また質問がしやすい雰囲気の中、活発な意見交換ができた。情報共有できたことを担当教科に活かすことができた。少人数の生徒であることを利点に活かすことができる、大変有意義な会であるので今後も継続していきたい。		
		活動計画	活動計画の実施状況				
		①-1 担任進行のもと、意見交換できるように進める。 ①-2 準ずる教育課程の生徒については、学部を超えて教科担任も参加し、意見交換する。 ①-3 高等部生については、進路を見据えた上で話し合いを進める。	①-1 担任が進行し、教科担任との意見交換が活発にできた。 ①-2 小学部より3名の教科担任が参加し、全教科における授業の展開の仕方や課題への取組等共通理解を図ることができた。 ①-3 特に高3生については、就業体験先での課題を授業で般化し、次回に活かすことができるよう、教科担任と共通理解を図ることができた。				
<教務課> ・児童生徒の興味関心や発達段階に応じた図書環境の充実に向けて取り組む。		① 児童生徒が興味関心を持っているものについての情報収集や、興味を持ってもらえるような図書の配架や演出を行う。	① 「興味関心のある本(絵本)についてのアンケート」を全校児童生徒に実施し、その結果得られた情報をもとに配架や演出を行った。	A	(所見) 視覚支援学校の巡回相談を利用し、アドバイスを受けて、見え方への配慮の視点を意識した。児童生徒一人一人の実態を踏まえた図書の選書や配架、書見台の活用など、図書環境の充実に向けて取り組んだ。また、昼休みに実施した巡回お話会では、音楽をつけたり触って楽しめるようにしたりと、児童生徒の興味関心や発達段階に応じた工夫を行った。これらの活動を通して、今年度図書室を利用してくれる児童生徒が増えた。今後も図書環境の充実に向けて取り組んでいきたい。		
		活動計画	活動計画の実施状況				
		①-1 児童生徒一人一人の知りたいこと、学びたいことについての情報を収集し、選書を行う。購入できない書籍に関しては、公立図書館の協力貸出を利用して配架する。 ①-2 図書室や雑誌コーナーに、一人一人の目線や手の届くところに書籍等を配架し、仕掛けを作って楽しさを演出する。 ①-3 お話会を前期後期1回ずつ実施する。	①-1 アンケート結果をもとに選書を行った。怪談特集、野菜特集、お菓子作り特集、スポーツ特集など、月ごとに特集するテーマを定め、協力貸出も利用しながら発信を行った。 ①-2 図書室や雑誌コーナー以外にも校内移動図書館を準備し、一人一人の目線や手の届きやすさに配慮した配架や、興味関心を引きつけるための工夫を行った。 ①-3 巡回お話会を前期後期2回ずつ実施した。				

重点課題	重点目標	自己評価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
		評価指標	評価指標による達成度	評価	(所見)		
◆安心安全な教育環境の整備と危機管理の推進	<小学部> ・災害時や緊急時でも、誰もがとっさに動くことのできる安心安全で分かりやすい環境の整備と防災情報の共通理解を図り、安心安全な学校作りを推進する。	① とっさの時にも対応できるように、児童にも教員にも分かりやすく安全な環境を整える。	① 危険箇所の周知・改善や視覚的な配慮でとっさの時にも対応できる誰もがわかりやすい安全な環境を整えることができた。	B	(所見) 児童の実態や状況に応じて必要なことが異なるため、関係機関からも情報を得て、個々の児童に応じた防災対策について共通理解を図ることができた。また、危険箇所の拾い出しや情報共有、全校への発信、そして、定期的なミニ研修など様々なことに取り組んだ1年であった。今後は、長期避難に備えての対策について実践も含めて取り組んで行く必要がある。		(評価) ・安心安全な環境作りや災害時の対応等様々な角度から想定して取り組んでいる。 ・自分達で危険箇所をチェックすることは児童生徒にとって危険を意識するよい取組である。 ・家庭に帰れない状況でどうするかを想定が必要である。 ・HUGという避難所の設営ゲームを通して、自分達でどう動くかを考えるのはどうか。 ・地域の防災行事に参加してみてもどうか。 ・通学路の安全性について不安がある。 (方策) ・長期避難時の想定を念頭に実践的な取組をしていく。引き渡し訓練や非常食を食べる、非常用トイレを使ってみるなど、いざというときに戸惑わないように備えることに取り組む。 ・通学路の安全について、通行車両に通学路であることを意識してもらうための働きかけを行う。
		② 保護者に引き渡すまでの対応を考え、実践を通して全員で共通理解を図る。	② 保護者への引き渡しまでの対応を関係機関からの情報も参考にして考え、小学部全員で共通理解を図ることができた。しかし、長期避難に備え、実践を通して対策を考えるまでには至らなかった。				
		活動計画	活動計画の実施状況				
	① 学部の教員で小学部の環境を確認し、危険予測をして安全な環境作りや対応を考える。	① 小学部ブレイルームの安全について意見を出し合い、危険箇所について周知・改善をした。視覚的な配慮と環境を整えることで対応をした。					
	②-1 保護者をはじめ、放課後等デイサービスや関係機関などから、災害時の対応や備えについての情報を得、学校の安全管理に活かす。	②-1 関係機関にて、重症障がい児者の災害時の対応や備え、関係機関施設内の災害時の備えについて情報を得た。それらを情報共有し、学校の安全管理に活かした。					
	②-2 学部の教員で保護者の引き渡しまでに想定される状況に対して考えたり、防災用品がどこにあるかを確認したりして共通理解を図る。	②-2 暑さ対策、トイレ対策について話し合ったり、防災用品について、学部研修で、学校全体・学部・児童個人として、どのような物がどこにあるか共通理解を図った。しかし、実践を通して対策を考えるまでには至らなかった。					
	<中・高等部> ・安心安全な学校生活を送れるよう、生徒が自分達で教室等の環境の点検を行い、防災意識を高めていけるよう取り組む。	① 生徒が各教室等の危険な箇所の有無の確認を1か月に1回行う。	① 1か月に1回、各教室等の確認を行うことができた。	A	(所見) 学部集会の中に組み込むことで、毎月最初に、今日は危険箇所の有無を確認する日だという意識を持つことができた。生徒一人一人に担当箇所を決めたことで、各々が責任を持って確認する姿勢が見られた。生徒は、4つのチェック項目に沿って危険箇所を確認し、回数を重ねる毎に、必要に応じて教員と再確認することもできてきた。生徒は少しずつではあるが、この活動を通して防災意識を高めていくことができた。今後も継続していきたい。		
		活動計画	活動計画の実施状況				
		①-1 中・高等部棟の各教室等の担当者を決め、毎月最初のチャレンジタイムの時間に実施する。	①-1 チャレンジタイムの時間の、毎月最初に実施する学部集会の中に、教室等の点検のコーナーを組み込み、実施することができた。				
	①-2 4つのチェック項目(壁のヒビはないか、棚の上に物を置きすぎているか、窓の鍵は壊れていないか、窓ガラスは割れていないか)を記入したシートを配付し、項目に対して○×(生徒によってはシール)をつけていくようにする。	①-2 生徒の実態に合わせて、各項目に対して○×記入もしくはシール(青○・赤×)を貼っていくことができた。					
	<特別活動課> ・近い将来、発生が予想される南海トラフ巨大地震や気象災害等から児童生徒の命を守るため、安全教育を通してより一層の学校防災体制の充実と児童生徒の安全確保の能力や教員の防災対応能力を高める。	① 災害時に必要な備蓄品の点検・見直しを行い、設備を整えて長期避難に備える。	① 季節に応じた備蓄品の必要性を考え、暑さや寒さに対応した物品を準備した。	A	(所見) 防災学習で生徒が自分の防災グッズを点検したり炊き出しを体験したりすることが、学校で避難するイメージを持つことにつながった。また、児童生徒の実態に応じた災害時の備えとして、備蓄品の見直しや点検を毎年実施することの必要性を感じた。避難訓練や防災学習、不審者対応訓練等についても今後も継続していきたい。		
		② 年間3回の避難訓練と年間2回の防災学習、年間1回の不審者対応訓練を実施する。	② 計画の通り年間3回の避難訓練や年間2回の防災学習、年間1回の不審者対応訓練を実施した。				
		活動計画	活動計画の実施状況				
	① 備蓄品の点検を年間2回行い、地域特性や児童生徒の実態に合った備蓄品を整える。	① 備蓄品の点検後、季節に応じた備蓄品として薪ストーブや薪、冷却シートやうちわ等の準備をした。					
	②-1 土砂災害警戒区域にある本校の地域特性を考慮し、避難訓練において避難経路や避難方法の確認や見直しを行う。	②-1 防災学習や避難訓練を通して、学校や学校周辺の避難経路や避難方法を確認し、安全確保について見直すことができた。					
	②-2 発電機やカセットコンロ、薪ストーブ等を使用して炊き出しや機器類の動作確認をする等の防災学習を行う。	②-2 防災学習では、生徒が学校で保管している防災食やグッズ等を各自で点検したり、薪ストーブの組み立てや炊き出し、試食等を体験したりして学校で安全に避難することについて考えることができた。					

重点課題	重点目標	自己評価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
		評価指標	評価指標による達成度	評定			
◆研修の充実と教員の専門性の向上	<研究課> ・外部講師からの指導助言を受ける機会を設けたり、校内での研修を充実させたりすることで自立活動や各教科等の指導における知識技能の向上を図り、教員の専門性を高める。	評価指標 ① 外部講師の招聘やオンラインの研修会等を通して自立活動や各教科等の指導に必要な知識や技能を学び、日々の学習活動や児童生徒の支援につなげるようにするため、研修会を年間3回以上実施する。	評価指標による達成度 ① 専門的な知識を持つ講師を招聘し、身体の緊張をほぐしたり手指の巧緻性を高めたりするための支援や、重症心身障がいのある児童生徒の学習活動の支援やその先を見据えた支援についての研修会を年間5回実施することができた。	B	(所見) 外部講師を招聘しての研修会やオンデマンド講演を通して、児童生徒の支援について、専門的な知識技能を得ることができた。また、研修会は、学習意欲を高めるための様々な機器等の活用方法、学校での学習が将来につながっていること等についても考える機会となった。しかし、教員の学校評価アンケートで専門性を身につけているという項目で、若干名ではあるが「そう思わない」という意見が見られ、十分な評価が得られなかったことは、専門的知識に対するニーズが多様化し、設定した研修で担えない面があったからだと感じる。	(評価) ・オンラインやオンデマンドの研修を活用し、専門性の向上を図ることができている。 ・ICT活用の研修についてGIGAスクールサポーターや校内の専門性のある教員による内容の深い研修が行われている。 (方策) ・病弱・肢体不自由の児童生徒の特性をふまえ、個別最適な授業を展開するため、年間を通して研究授業を実施し、全校教員で研究協議を行うことで授業力の向上を図り、教員の専門性を高める。	
		活動計画 ①-1 理学療法士や作業療法士を招聘し、自立活動や各教科等の指導に関する研修会、またICT機器による支援等に関する研修会を実施する。 ①-2 オンラインでの研修会のうち、本校児童生徒の実態に応じた内容のものを取り上げ、ミニ研修会として実施する。	活動計画の実施状況 ①-1 理学療法士や作業療法士による自立活動に関する研修会を2回、作業療法士によるICT機器を活用した支援に関する研修会を1回実施することができた。 ①-2 全病連栃木大会や中四病連高知大会のオンデマンド講演について校内で周知し、希望研修会として実施した。				
	<情報視聴覚課> ・児童生徒のニーズに即したICT教材や支援機器を使用するために、教員のICT活用に関する指導力の向上を図る。	評価指標 ① ICT機器や支援機器等の活用に関する校内研修を、情報視聴覚課員による研修と、GIGAスクールサポーターによる研修を交えて年間10回以上実施する。	評価指標による達成度 ① GIGAスクールサポーターから助言を受けつつ、研修の内容を課内で検討し、本校の実態に即したものにすることができた。ICT機器や支援機器等の活用、アプリケーションの有効活用に関する校内研修を年間13回実施することができた。	A	(所見) 希望研修ではアンケートを実施し、ニーズが多かった内容の研修を行った。参加者が積極的に研修に取り組み知識とスキルを身につけることができた。全体研修では、GIGAスクールサポーターから助言を得て、TeamsやMetaMojiClassRoomの研修を行った。その後の授業研究会でMetaMojiClassRoomで意見を共有しながら研究協議を行い、実践を通して使ってみることで、授業でもICTを活用する教員が増えた。		
		活動計画 ①-1 教員対象のアンケートを行い、ICT機器や支援機器等の活用に関するニーズがあった内容についての校内研修を実施する。 ①-2 本校にとって、今後学習効果を高める新しい分野を研修内容とし、GIGAスクールサポーターと綿密に打ち合わせを行い研修を実施する。	活動計画の実施状況 ①-1 教員の意見を汲み取り、ニーズの多かった支援機器やソフトウェアについての研修を行った。 ②-2 研修内容について、繰り返し打ち合わせを行った。課内で内容の精査を行った後、全教員を対象として研修を行った。				

重点課題	重点目標	自己評価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
		評価指標	評価指標による達成度	評定			
◆保護者・地域及び関係機関との連携や協働による持続可能な学校作り	<全学部> ・地域の図書館と連携して、バリアフリーや合理的配慮について考える。	① 地域の図書館を利用し、バリアフリーや合理的配慮の視点で、感じたことや気づいたことを図書館の職員に伝え、これまで以上に誰もが利用しやすい図書館になるように提案する。	① 全校児童生徒で鴨島図書館に行き、地域の公共施設を利用するだけでなく、誰もが利用しやすい図書館になるように、意見をまとめ、伝えることができた。スタッフの方からは「貴重な意見をいただいた」と感想をもらった。	A	(所見) 図書館長より、児童生徒に施設のバリアフリーについて見てもらいたいとメッセージをいただき、目的を持って鴨島図書館に行くことができた。自分達の小さな気づきや意見が届き、施設が改善されることは児童生徒にとって大きな達成感となった。 また、この取組を通して、地域の図書館が身近な存在となり、その後の利用にもつながり、児童生徒が地域に踏み出すきっかけとなった。保護者からも「子どもたちの気づきや意見が、より快適なバリアフリーにつながることはうれしい」との意見があった。	・施設で合理的配慮として設置しているものが、実際に使いやすいものになっているのか検証することができた。 ・児童生徒にとって地域に出て行く経験となり、自分達がしたことが地域のためになったという自信につながった。 ・取組を継続することが大切である。	
		活動計画 ①-1 全校児童生徒で鴨島図書館を利用し、利用しやすかった点や改善点について気づいたことをそれぞれにまとめる。 ①-2 全校で気づいたことを掲示物にまとめ、代表者が図書館に持って行く。	活動計画の実施状況 ①-1 6/27鴨島図書館長の講話を実施し、事前学習を行った。7/4全校児童生徒で鴨島図書館を利用し、ワークシートをもとにそれぞれの気づいたことをチェックした。 ①-2 気づいたことをそれぞれでまとめ7/18に、全校で発表した。9/13に気づいたことをまとめたものを代表者が鴨島図書館に持って行き、来館者に見てもらえるように掲示させてもらった。				
	<特別支援教育課> ・生徒の進路保障ができるよう、関係機関や地域と連携を図る。	① 高等部1～3年生の就業体験を、それぞれ1回以上実施する。	① すべての高等部生徒に対して、見学を含む就業体験をそれぞれ1～6回実施した。1月末に就業体験報告会を全員で行った。	A	(所見) 高等部3年生は、就業体験を2～4回、見学を2回程度実施し、それぞれの実態やニーズに応じた進路選択につなげた。 夏季適応訓練や地域医療現場体験、就労活用セミナー、ゆめチャレンジフェスティバル等の参加や発表の機会を設定することで、生徒の進路に対する関心を高められた。また、全ての中・高等部の保護者と適宜面談し、グループホームや居宅介護、短期入所等の福祉サービスの情報提供を行った。 今後も関係機関と連携しながら、情報収集や進路開拓を重ね、一人一人の進路保障につなげていきたい。		
		活動計画 ①-1 進路希望調査や懇談を通して、本人及び保護者のニーズを把握する。 ①-2 生徒や保護者に提供できる情報を得るために、進路開拓や他機関との連携を図る。 ①-3 保護者、事業所、学校、関係機関との連絡調整にあたり、就業体験ができる環境を整える。	活動計画の実施状況 ①-1 進路希望調査を4月に実施した。本人や保護者、担任、学部長と適宜話し合いながら、それぞれのニーズの把握に努めた。 ①-2 地域の自立支援協議会や研修会等への参加や、新規の事業所等の進路開拓に積極的に取り組んだ。 ①-3 校内外の関係者とのつながり作りをすることで、就業体験や見学等を円滑に進めることができた。				

※【評定の基準】 A:十分達成できた B:概ね達成できた C:達成できなかった